それぞれのエルサルバドル

私がエルサルバドルで暮らしていたのは 2012 年から 2015 年までの 3 年間。外務省の在外公館派遣員制度を利用し、現地の日本大使館に勤めていた。当時からお世話になっていた文化担当の現地職員さんから「エルサルバドル体験記」についてお話をいただき、今この文章を書いている。エルサルバドルで過ごした日々を振り返ることのできる貴重な機会をいただけたことに感謝したい。

当時住んでいたのは、首都サンサルバドル市内の丘の上にあるモンテ・アルトというマンション。Monte Alto とはスペイン語で「高い山」という意味だ。その名のとおり、テラスからは市内の一角を臨む緑豊かな景色が広がっていた。職場の大使館までは車で 5 分という近さ。グラディスさんという優しいおばあさんが管理人だった。モンテ・アルトには美しい庭がついていて、孔雀の家族が放し飼いにされていた。当時はデジカメを 1 台持っていて、それも殆ど使っていなかったが、もしその時スマートフォンを持っていたら、庭を通る度に孔雀たちの写真を撮って日本の家族や友人に送っていただろう。自由にトコトコ歩き回り、時折パフォーマーのように羽を広げる姿は見事で、モンテ・アルトの魅力の一つだった。

エルサルバドルの朝は爽やかで、差し込む朝日と鳥の鳴き声で目が覚める。朝食をとってから大使館へ。派遣員の仕事は、赴任者やその家族の生活立ち上げのサポート、出張者や文化イベント等のため日本からやってくる来訪者への対応、現地案内や通訳・翻訳、ホテルや航空券の手配など。私のスペイン語はたどたどしく、社会人 1 年目ということもありずいぶん失敗もしたが、ベテラン職員さんたちがいつも優しく助けて下さった。最初は電話を受けるたびに緊張して手が震えたが、それも徐々に慣れてきて、先輩職員の話し方をまねしながら何とか対応できるようになっていった。

昼になると、待ちに待ったランチタイム。大使館のあるワールド・トレード・センターから少し坂を上った場所に、ボナペティという名の現地食堂があった。見た目は年季の入った車庫にテーブルとイスを並べただけのようなこじんまりしたお店だったが、素朴な外見からは想像できないほど、ご飯は絶品だった。私たちはそのお店のことを「ボナ」と呼び、足繁く通っていた。

お店に着くと、店長のおじちゃんが溢れんばかりの笑顔で迎えてくれ、私をみるなり威勢よく"Hola señorita! ¿Qué tal?”（やぁお嬢さん！調子はどうだい？）と声をかけてくれる。ここで二言三言おじちゃんと言葉を交わすのが日課で、この何でもないやりとりがいつも楽しみだった。現地食堂のメニューは毎日変わる。いろんなおかずが並んでおり（チキンの出現率は高め）、食べたいものを指させばおじちゃんが良い塩梅によそってくれるのだ。たくさん選んでも 3 米ドルほど、それで十分すぎるほど満腹になった。私のお気に入りはラザニアで、これが最高においしい。飲み物はタマリンド（マメ科のフルーツで、サヤの中に果肉があり、独特の酸味がある）のジュースが出てくることが多かった。タマリンドの甘酸っぱさは最初こそ慣れなかったが、数か月が過ぎる頃にはすっかり好きになっ

ていた。この現地食堂には大使館の同僚たちと数人で行っていたが、食いしん坊の私は「あれも、これも」と、並んでいるおかずは殆ど全て入れてもらっていた。みんな目を丸くして「山ちゃん、そんな量食べられる？！」と聞いてくれたが、心配ご無用、自分でも驚くほどの食欲でペロっと平らげていた。

▲タマリンドのジュース

▲現地食堂（comedor）のメニュー

日本に帰ってからもよく思い出すのは、そんな日常だ。ボナペティはその後、店を畳んだと聞いたが、おじちゃんは今どこで何をしているのだろう。モンテ・アルトのグラディスさんはお元気だろうか。旅行代理店のレイナさん、不動産のパティさん、大使公邸スタッフの皆さん、日本食レストラン「かまくら」の皆さん、お世話になった大使館の皆さん。離れていてもどんな時代でも、どうか皆さんが幸せに暮らしていますように。

日本に帰ってから「エルサルバドルって、どんな国？」と聞かれることがよくある。
「国土は小さいけれど、自然豊かでコーヒーがおいしい国」
「勤勉で優しい人々が魅力の国」
「ププサという郷土料理がある国」
そんなふうに答えながら、なんとなく違和感をおぼえる。一つの国の魅力というものは、言葉では伝わらないのではないかという気がする。私は３年間という限られた時間の中で、エルサルバドルという国のほんの一部しか見ていない。今のエルサルバドルがどんな時代を迎えているのか分からないし、知りたいと思う。

今後、関わりを持つ方や訪れる予定のある方には、その人自身の目に映る、肌で感じる、それぞれのエルサルバドルが見つかるはずだ。

▲薩摩琵琶の専門家と一緒に人生初のテレビ出演

▲運転中に牛の群れが道路を横切ることも。そんなときは焦らず、牛たちが無事に道を渡るのを待つ。

山田 桂美（やまだ けいみ）氏
2012 年から 2015 年まで在エルサルバドル日本国大使館にて在外公館派遣員として勤務。2016 年、東京にあるアフリカや中南米を主とした海外ロケのコーディネート会社に就職。撮影コーディネーターとしてテレビ番組・映画・広告などの撮影に同行、１～２か月に１回のペースでアフリカを訪れるように。新型コロナの影響で海外渡航が難しくなってからは、国内でスペイン語通訳・翻訳者・取材コーディネーターとして活動中。